

---

# いい加減にしてください

石子

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いい加減にしてください

### 【著者名】

IZUMI

### 【作者名】

石子

### 【あらすじ】

急いでいるのに、しつこく呼び止められた僕は、「いい加減にしてください」と怒鳴ってしまう。そこから少し奇妙なことが起こって…

## いい加減

- 1、ほどよいところ
- 2、すじみちがとおらず、でたらめな様子
- 3、徹底しない様子

「いい加減にしてくださいっ！」

僕は思わず怒鳴っていた。相手が女性なので怒鳴るつもりなどなかつたが、あまりのしつこさに我慢の限界を越えてしまった。

理由はいたつて単純。会議に遅れそうなので半ば走るように歩いていた僕に、いきなりこの見ず知らずの女性が「一緒にお茶でも飲みませんか」などと言つて近づいて来て僕の腕をつかみ、近くの喫茶店に引っ張つて行こうとするのだ。

断つてその場を去ろうとしたが、女性の方は腕を放してくれる気配もない。「急いでいる」と言つても耳を貸さうともしない。

そこで怒鳴つてしまつたわけだつた。

でもこの女性、見た目はすごく大人しそうで知的な感じなのでこんな常識はずれな行動をするようには見えないのだが……。

などと思いつつもう一度女性の方を見ると、怒鳴られて一瞬驚いたような顔をした彼女だが、急に笑顔になつた。

……なんだ？

その笑顔はとても晴々としていてうれしそうだった。まるで僕が怒鳴るのを待つていたようにも見える。

そして彼女はくるりと踵を返し、もう一刻も早く僕から離れたいというような速さで人込みに紛れて行つてしまつた。

なんだつたんだ……？

僕は呆気にとられて、その女性が去つて行つた方をじばらく眺め

ていた。

ただの変な女……。

それだけでは済ませられない氣がして、なんだか不安になつた。

「馬鹿者！ あれほど遅れるなど言つておいたのに遅刻しよう…」

課長の声が耳にさわる。

「はあ……。すみません」

結局、僕は会議に遅れてしまつたのだった。あの女性のせいでもあるけれど、あの後タクシーでも使つていれば間に合つた時間だつたのだが……。

何故かもうどうでもよことこの気分になつてしまい、のんびりと歩いて行つた結果だつた。

「まあまあ、課長。こいつだってたまには遅れることもありますよ。今まで一度も遅刻したことなかつたんですから、少し大目に見てやつてくださいよ」

と、いう先輩の執り成しで、ようやく課長の怒鳴り声から解放された。

「先輩、ありがとうございました」

ひとまず礼を言つ。

「いや。それにしてもこつもきちんとこつてお前が課長に怒られるなんてめずらしくな」

「はあ。まあ……」

確かに先輩の言つ通りだつた。僕は几帳面な性格で、仕事上のミスなどほとんどしたことない。

それが、あの女性に会つてからどうも調子が狂つてこる……。

今日は何度課長に怒られたる？ まだ耳がキンキンする。仕事が手につかずぼつとしていて怒られ、外回りの途中に喫茶

店に寄つていて帰るのが遅くなつて怒られ……。

家に帰つても何も食べる気にならず、ベッドに寝転がつてぼんやりしていると、なんだか誰かに見られているような気がした。

部屋の中をぐるりと見回してみる。特に異常はない……。いや。

テーブルのところで視線が止まつた。

テーブルの上には……なんか……小汚いじいさんが……

僕は、ガバッと起き上がる！

「あ……あ……あの~。あなたは一体……？」

言葉が通じるのかは、はなはだ疑問だつたがとりあえずテーブルの上からこちらを見ているじいさんに話し掛けでみた。

じいさんは普通の人間の半分くらいのおおきさで、白いぼさぼさの髪、黒っぽい顔という容姿だった。

「何を驚いておるんじや。お前が、わしに来てほしいと懇つておつたよつじやから来てやつたんじやぞ」

はあ？

「えつと……。とりあえずあなたは一体何者なんですか？」

「あん？ わしは『いい加減』の神様じや」

？

「なんでそんな人が僕の家にいるんです？」

「今朝までは女に付いとつたんじやが、お前が『いい加減にしてください』と頼むもんじやからこつちに来てやつたんじやよ」

『いい加減にしてください』……？

つまり、『いい加減な人間にして下さ』『ところとなるんだらうか？

そう考えると今日の出来事にも説明がつぐ。つまりはこのじいさんが僕にいい加減な行いをさせていたところじだ。

「あの。僕はもういいですから、他の人のところに行つてくれませんか？」

「ダメじや」

頼んでみたが、あつさり断られた。

困ったなあ。

「どうしてダメなんですか？僕はいい加減な奴にはなりたくないんです。あなたにいられる迷惑です」

じいさんが怒り出したらどうしようかと思つてびくびくしながらもはつきりと言つてみた。でも予想に反して、じいさんはなんだか寂しそうな顔になつたので少し心が痛んだ。

「最近、すべてをきちんとこなさなければ社会から弾き出されてしまうような時代になつたと思わんかね。みんなが完璧な人間になろうとする。そんな窮屈な生活に、心の中で音を上げる者が増えてきた。だからわしみたいな神が現れたんじゃ」

そのじいさんの話に、思わず納得してしまつた。確かに今の社会はなんでもこなせる人間を求めている。

僕は性格が真面目だから、上司に言われた事はかなりきちんとこなしていると思うし、会社からも重宝がられている。

しかし、そういうのを持続させるのは物凄くしんどい。たまに、仕事が嫌になつてもっと手抜きをしたいと思うことがあつた。それこそ「いい加減」を求めているということなんだろう。

神様がどんな風にして現れるものなのかは知らないけど、僕のようないいをもつている人がたくさんいたら、この「いい加減の神様」みたいなのがでてきても不思議じゃないのかもしれない。

「おっしゃる通り、完璧であることを押し付けられている人はたくさんいるでしょうね。僕も実はそうですから……」

「どうじやろ。他の奴がわしに頼むまではお前に付いてやるから

「いい加減にしてください！」

じいさんは、満足気にうづうづ言つた。

「いい加減にしてください！」

そう怒鳴られて、僕は思わず笑みをこぼす。

そして怒鳴つた相手にくるりと背を向けて足早に歩き去つた。

なんだなんだ言ってみても、社会で暮らしていくにはいい加減でいるわけにはいかないからな……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6129d/>

---

いい加減にしてください

2010年10月8日15時12分発行